佐賀医学史研究会報　第４３号　2012/11/12

総会の発表者を募集しています！

佐賀医学史研究会総会が一ヶ月後に近づいてまいりました。当日の予定は以下の通りです。報告者を２人(1 人、３０分程度)募集しています。ふるってご参加を。

記

◎「佐賀医学史学研究会総会・研究報告」

１．日　時：平成２４年１２月１６日（日）午後１５；００～１８；００
２．場　所：「グランデはがくれ」（３Ｆ：天山の間）５０名収容。
３．日程
　１５：００～２０　総会
　　本年度事業報告・決算報告
　　来年度事業計画案
　１５：３０～　研究報告
　報告１）　樋口浩康「佐野常實のドイツお墓調査について（仮）」
　１６：００～　報告者１名
　１６：３０～　報告者１名
　１７：００～　会員近況報告等
　１７：３０　終了
※発表会でのプロジェクターは持参、スクリーンとレーザーポインターは借用。

◎「佐賀医学史学研究会」忘年会

１．日　時：１２月１６日（日）　１８；００～２０；００
２．場　所：「グランデはがくれ」（３Ｆ：赤絵の間）
３．会　費：５０００円（飲み代・税込み）
４．参加者は、２５名程度で予約しています。忘年会参加者は人数把握のため、事前に事務局までご連絡ください。

会員たより

■講演会・・１２月９日１３時３０分から、佐賀市立図書館２階多目的ホール
　相良隆弘会員講演「郷土講演日本にドイツ医学を導入した佐賀の偉人相良知安」す。
■展示会・・１０月２７日～１２月９日まで、東京文京区ふるさと歴史館
　「近代医学のヒポクラテスたちー洪庵、知安、そして鴎外」
■医史跡めぐり・・１２月２日（日）９時ごろから・・佐賀城下めぐり
　お城の西南にある医史跡めぐりをします。詳細は次号。
　申し込みは鍋島報效会徴古館（0952-23-4200）まで
■　第三回地域史惣寄合・・１２月８日、９日、於佐賀大学
　地域史料の保存、公文書館、佐賀の地域特性などについて、小谷汪之（学術会議連携会員）、吉田伸之、奥村弘、塚田孝ら地域史研究者が集って最新の地域史研究について共同研究会を開きます。入場無料です。詳細は次号で。

佐賀医学史話

鍋島直茂・勝茂と朝鮮系医師林栄久・林刑左衛門

■勝茂の憑きもの観　初代佐賀藩主鍋島勝茂の淋病の話は、会報３３号に書いた。勝茂は政治にも病気に対しても合理的な考え方をしていたといわれる。「慶長 15 年（1610）６月１０日に子の彦太郎が病気で死亡した際に、二、三人の「より」（霊媒者）が彦太郎の病気は生きている人が憑りついたと口走ったので、その疑いをうけた７，８人の人を殺したという国許からの報告を受けて怒り、人が恨みをもったとしても人に憑りつくはずがない、殺された人達の親子は勿論、藩内の武士達も「なにと女子申しくるいひ候ニまかせ成敗仕り候」と考えるだろう。今になっては取り返しのつかぬ事ではあるが、「より」は憎い事をしたので殺してしまえ、と命じている」（『佐賀市史』第二巻７ページ）。このとき国許にいた高齢の直茂は、可愛い孫が亡くなったのだから憑依などを信ずるのは無理もないが、家臣らがそういう（非合理的な）ことは止めることが必要だと叱っている。

■鍋島直茂の末期　晩年の鍋島直茂は、病状が悪化したとき、毒を与えるものがいると思い込み、薬を飲まなかった。そのため、勝茂は、侍医の生益（姓不詳）や、薬役の林刑左衛門（曲直瀬玄朔門人）らに、なんとか上手に服薬させるよう命じている（『直茂公御年譜』近世史料編第１編第１巻、826 ページ）。しかし、そのかいもむなしく、直茂は元和４年６月３日に亡くなった。８１歳。追腹（殉死者）が１２人も出た。

　薬役の林刑左衛門の父は、林栄久という直茂・勝茂に仕えた朝鮮出身医師である。直茂時代の佐賀藩は、朝鮮文化と人材を積極的に取り入れていた。『葉隠聞書』三には、鍋島直茂の耳の瘤の治療とその後の養生に関して、侍医林栄久の名前が出てくる。ただし、『葉隠聞書』は、林刑左衛門と林栄久を混同しているかもしれない。

■直茂の断食と栄久　直茂の亡くなる前年、すなわち元和３年（１６１７）のこと、直茂の耳に瘤ができ、蜘蛛の糸で切れば治るというので、その通りにしてみたら、キズが癒えずに腐り始めてしまった。直茂は、天道より耳におとがめがあった、このままだと子孫の恥なので、大やぶれにならないうちに死ぬと絶食を始めてしまった。勝茂が食事をすすめても頑として受け付けない。

勝茂が、親の死に場になっても薬を呑まさなかったとなれば、後日の面目も立ちませぬ、ぜひ薬を飲んで欲しいと懇願した。すると信濃守（勝茂）の面目を立てるために軽い薬なら飲むとの仰せだった。勝茂はほっとして、御薬煎役林栄久に薬を処方させた。栄久が、直茂に薬を差し上げたあとに、勝茂は栄久を呼び出した。勝茂はことのほか立腹し、「お前は心安き者で律儀だから薬の事を申しつけたのだが、不届き千万のことをしたな、この薬には米を加えてあるだろう。有り体に申せ」と問い詰めた。

栄久は泪を流して「（直茂様）は、数日食わずで、体力が落ちていましたので、少し米を加えて力を付けることが、薬となり本復されると思い、そのように致しました」と申しあげた。勝茂は、今後はそのようなことをしないようにと仰せ付けた（『三河物語・葉隠』岩波日本思想体系二五）２３０～３１ページ）という話である。勝茂が心安き者として栄久を信頼していたことがわかる。

■　朝鮮系医師林栄久　栄久については、「〇林栄久、後利兵衛貞正、父一徳斎、姓秦、名伯、字文烈、一徳ハ其号、朝鮮人也、直茂公朝鮮ゟ御連帰、栄久、医道相心得候付、陽泰院（直茂夫人、勝茂母）様方二も御薬等差上候、勝茂公御代初利兵衛二改、物成百拾石を領、寛永六年五月、六拾歳二而死、貴泉宗冨、其子刑左衛門貞之、忠直公江追腹、其子六太夫貞春、慶安四年死去、男子無之二付、女江伯父遠岳源右衛門子刑左衛門貞俊聟養子被仰付、物成六拾石被下之、其後三拾四石五斗と成、孫形左衛門貞光、享保十八年浪人、同十九年五人扶持二而帰参、五代之孫六之助豊覚也」（『佐賀県近世史料第一編第三巻』３１７ページ）とある。

つまり、林栄久は、朝鮮人林一徳の子であり、鍋島直茂が朝鮮出兵の凱旋の際に我が国へ連れ帰った。栄久は、勝茂の代に名を利兵衛貞正と改めた。医道に通じ、直茂、勝茂父子の寵愛を受け、寛永６年（1629）５月、６０歳で没した。法名一山宗無。墓は佐賀市龍泰寺にある（栗原荒野『校注葉隠』３２１ページ）。

栄久の生没年は寛永６年に６０歳で没したとあるから、元亀元年（1570）生まれとなる。直茂がなくなったあと、元茂のもとでも藩医をしており、三平（元茂）から、祖母芳林院の容態を気遣い、利兵衛へその養生を頼んだ書状がある（略）。

■　林刑左衛門の殉死　勝茂二男忠直は、江戸で疱瘡にかかり、寛永１２年（１６３５）正月２８日に、父にさきだって２３歳で亡くなった（『佐賀県近世史料』第１編第２巻、３９１～３９４ページ）とき、林刑左衛門が殉死している。

この殉死については、『葉隠』では、林栄久が、寛永六年に亡くなるとき、刑左衛門をかたわらに呼び、私（栄久）は勝茂公に殉死すべきところ、公より早く死ぬのは残念と伝えたところ、刑左衛門が、私がその意志を継ぎますからと答えたとあり、病弱だった刑左衛門が、忠直に殉死したと伝えている（『三河物語　葉隠』岩波日本思想体系２５、346～４７ページ）。

編集後記

会報４３号をお届けします。総会が近づきました。発表と大勢のご参加をおまちしています。また１２月には、医学史関連行事も多くあります。ぜひお出かけください。（青木）